

北海道開拓の村の建物ゆかりの地名

建物があった場所などの地名を、アイヌ語地名研究の第一人者・山田秀三の著作や資料でたどります。

建物番号	建物	ゆかりの地名	
3	旧手宮駅長官舎	手宮	1880(明治13)年、北海道最初の鉄道が開通したのが、小樽の手宮と、札幌駅との間でした(のち札幌から幌内まで延伸)。この「手宮」は、アイヌ語に由来する地名なのです。
4	旧開拓使爾志通洋造家	爾志通	いま札幌の都心部は「北〇条西〇丁目」のような町名が付けられていますが、明治のごく初めのころ、主な通りは「石狩通」のような名前が付けられていました。「爾志(にし)通」も、その一つだったのです。
7	旧有島家住宅	ニセコ	有島家住宅のあるじだった有島武郎が所有した農場があった町・ニセコ。今やリゾート地としても世界的に有名ですが、この「ニセコ」もアイヌ語に由来するのです。
9	旧小樽新聞社	小樽	小樽市の「小樽」。いまは多くの観光客でにぎわう「オルゴール堂」のあたりに「オタルナイ運上屋跡」の碑が建っていますが、じつは「小樽内」は、「小樽郡」と「札幌郡」の境にあったのです。
14	旧島歌郵便局	島歌	島歌郵便局があったのは、せたな町の「島歌」。アイヌ語に由来する地名だとされています。
16	旧渡辺商店	中頓別(頓別)	渡辺商店があったのは、北海道の宗谷地方にある中頓別。オホーツク海側には「浜頓別」も。この「頓別(とんべつ)」は、アイヌ語に由来します。
17	旧浦河公会会堂	荻伏	浦河公会会堂があったのは、浦河町の「荻伏」。いくつかの説があるようですが、アイヌ語に由来する地名だとされています。
23	旧武岡商店	捫別	武岡商店があったのは、現在の新ひだか町静内の捫別。「もんべつ」という地名は道内にいくつもありますが、この「捫別」もアイヌ語に由来するとされています。
26	旧藤原車轆製作所	妹背牛	藤原車轆製作所は、現在の妹背牛町にありました。「妹背牛(もせうし)」も、アイヌ語に由来する地名です。
28	旧広瀬写真館	岩見沢	広瀬写真館があったのは、石狩平野の中央に位置する岩見沢。さて、この「岩見沢」の由来は……。
32	旧土谷家はねだし	熊石	土谷家があったのは、現在の八雲町の日本海側である熊石。「熊石」はアイヌ語に由来するとされています。
38	旧ソーケシュオマベツ 駅通所	ソーケ シュ オマベツ	ソーケシュオマベツ駅通所は、1907(明治40)年、喜茂別(きもべつ)村と大滝(おおたき)村の間に設けられました。近くを「ソーケシュオマベツ川」が流れています。さてこの「ソーケシュオマベツ」は……。
39	旧田村家北誠館 蚕種製造所	浦臼内	養蚕製造所があった現在の浦臼町。浦臼内(ウラウスナイ)川という川も流れています。この「浦臼内」、道内には他にも似た名の川もありますが、どう考えるべきか、山田秀三氏もかなり考え、調べたようです。
42	旧山田家養蚕板倉	琴似	旧山田家養蚕板倉があったのは、札幌市琴似。いま琴似といえば、札幌市西区、JRや地下鉄の琴似駅のあるあたり。でも、明治の初めの「コトニ」は、今の札幌駅や北大に近いところだったのです。
48	旧菊田家農家住宅	野幌	菊田家は新潟県から現在の江別市野幌に移住してきました。この「野幌(のっぽろ)」も、アイヌ語に由来する地名です。

紹介した地名の場所



(※ 地図内の丸数字は「建物番号」)

山田秀三 (1899～1992)

ひとつひとつの地名について、古い地図や文献をていねいに調べ、アイヌ語の知識をもとに地名の意味などを考え、そのうえで実際に現地を訪れて確認するという科学的なアイヌ語地名研究の基礎を築いた人です。



建物番号	建物	地名	山田秀三の説明によれば……(山田秀三の著作からの引用)
3	旧手宮駅長官舎	手宮	手宮は小樽湾の一番奥の最もよい舟着場で、西蝦夷日誌は「地形東向の湾にして如何なる風雨の時も波浪なし」と書いた。明治の初めに、幌内炭移出のため鉄道が敷設された時も、ここまで線路を伸ばして港とし、手宮港と呼んだ。それが小樽港のはじまりである。手宮は、アイヌ語テムン・ヤ (tem-mun-ya 菅藻の・岸) の意。海藻が多く、それが岸に打ち上げられていたのでこの名で呼ばれたという。(『北海道の地名』)
4	旧開拓使爾志通洋造家	爾志通	札幌の町名は、その都市計画が行なわれた頃には、現在の何条何丁目ではなかった。それらは、アイヌ地名ではないが、何かと旧文書などに出て来る……実際は、現在の町名に落ちつく迄に、何度か追加、改正が行なわれたのであった。(『札幌のアイヌ地名を尋ねて』)
7	旧有島家住宅	ニセコ	ニセコアンベツ川 国鉄昆布駅の東方、ニセコアン・ヌプリ (ニセコ岳) の西側を流れ下り、尻別川に入る北支流。この山の名は、「ニセコアンベツの上にある山」という意味でついたものであろう。〔知里博士「アイヌ語入門」※〕ニセイコアンベツ (Nisey-ko-an-pet 絶壁・に向って・いる・川) ニセイ (nisei) は、我々が峡谷と呼ぶようなところ。その峡谷の方に向って溯っている川の意。(『北海道の川の名』) ※知里博士「アイヌ語入門」=知里真志保『アイヌ語入門 とくに地名研究者のために』
9	旧小樽新聞社	小樽	名のもとになった小樽内川は小樽郡と札幌郡 (後には共に市) の境を流れていた川で、その川口は銭函の東、今は新川川口となっている処であった。そこは古く元禄郷帳 (1700年) にも「おたる内」……と書かれた処で、当時アイヌのコタンがあって、和人もそこで漁場を開いていたものらしい。 後に運上屋を今の市街地入船町に作り、小樽内川筋のアイヌをその周辺に移した。当初のうちは、当時の習慣で旧地の名をそのまま使って小樽内場所と称していたのであるが、後に下略して小樽と呼ぶようになった。小樽内の語意ははっきりしない。……いずれにしても小樽の「おた」は砂浜 (ota) の意。20年ぐらい前、その地形を見に行った時には、小樽内川の川尻が、砂浜の中に長く古川の姿で残っていたのであるが、このごろはもうその形も失われているようである。 (『北海道の地名』)
14	旧島歌郵便局	島歌	永田地名解※は「シュマ・オタ。石・沙。今島歌村と云ふ」と書いた。岩のある砂浜と読んだものか。せまい砂浜の先の海中に千畳敷のような岩のある処である。松浦氏再航蝦夷日誌※※ではシモウタと書いた。下の方のウタ (この辺オタを歌で呼ぶ) だったかもしれない。(『北海道の地名』) ※永田地名解=永田方正『北海道蝦夷語地名解』(1891年初版) ※※松浦氏再航蝦夷日誌=松浦武四郎が蝦夷地調査の成果をまとめて出版した本



【爾志通】(赤線部分)
山田秀三『札幌のアイヌ地名を尋ねて』
掲載「明治六年札幌の町名」



【小樽】
山田秀三による1973(昭和48)年の調査記録より。左は現在の小樽市街にある「オタルナイ運上屋跡」の碑。右は当時の小樽内川の河口付近の様子を描いた地図。



建物番号	建物	地名	山田秀三の説明によれば……(山田秀三の著作からの引用)
16	旧渡辺商店	中頓別(頓別)	枝幸郡の北部を流れている頓別川は流長74 キロの大河で、その川口の処に、北側の大きな湖(クッチャロ湖)の水が流れ込んでいる。それでト・ウン・ペツ「to-un-pet 湖・の(に入る)・川」と呼ばれていたのが頓別川となった。 古くは海岸から知られたので、川口の処が頓別で呼ばれたが、明治中年から砂金採取で内陸にも人が入り出した。大正5年(1916年)に枝幸村から分村して頓別村ができたのだが、同10年中頓別村を分村し、昭和26年浜頓別町と改称した。 (『北海道の地名』)
17	旧浦河公会会堂	荻伏	明治29年図※では元浦川の西海岸に東からポロ(大きい)・オニウシとボン(小さい)・オニウシの二川が海に入っている。 現在前者が浜荻伏川、後者が無名川の称である。そのボンオニウシ(無名川)が浦河町と三石町の境である。(中略)これはオ・ニ・ウシ・イ(o-ni-ush※※-i)で「そこに・木が・立っている・処」と読んだものであった。ただし、一般の土地ではこの形なら「川尻に・木が・生えている・もの(川)」であった。ここも、もともとはその意であったのが、後に今のように解されたのかもしれない。(『北海道の地名』) ※明治29年図=1896(明治29)年に陸軍測量部が作成した縮尺5万分の1地形図
23	旧武岡商店	捫別	捫別川が流れていて前は土地もその名で呼ばれていたが、道内諸地に同音の地名があるので東静内と改名した。静内町の東部であるという意であろう。捫別はモ・ペツ(mo-pet 静かな・川)の意であったろう。(『北海道の地名』)
26	旧藤原車襦製作所	妹背牛	妹背牛は当初は望畝有志の字を使っていたという。…… モセ・ウシ(mose-ush※)には「いらくさ・群生する」という意と、「草刈りを・いつもする」という意があり、伝承でもないどっちだったのか分からない。……松浦図※※を見るとこの地区の石狩川沿いにモセウシという小川が描かれている。今の市街地のすぐ南の処である。それが妹背牛の名のもとになったのであろうか。(『北海道の地名』) ※「ush」は、現在ひろく用いられているアイヌ語のローマ字表記では「us」となります。 ※※松浦図=松浦武二郎『東西蝦夷山川地理取調図』
28	旧広瀬写真館	岩見沢	石狩地方の中央で、鉄道貨車輸送の中心駅になっているが、開拓時代も交通の要衝であったのであろう。行政区画便覧は「明治十五年市来知(現在の三笠市)に開拓使が開拓のため集治監を設置し、その折同監に通う人達が一棟の休憩処を利用して湯に入り疲れをいやした浴沢(ゆあみざわ)から変化して今日のように呼称されるに至ったと伝えられている」と書いた。市街は幾春別川中流の南側の処にあり、国道12号線が通っている。(『北海道の地名』)

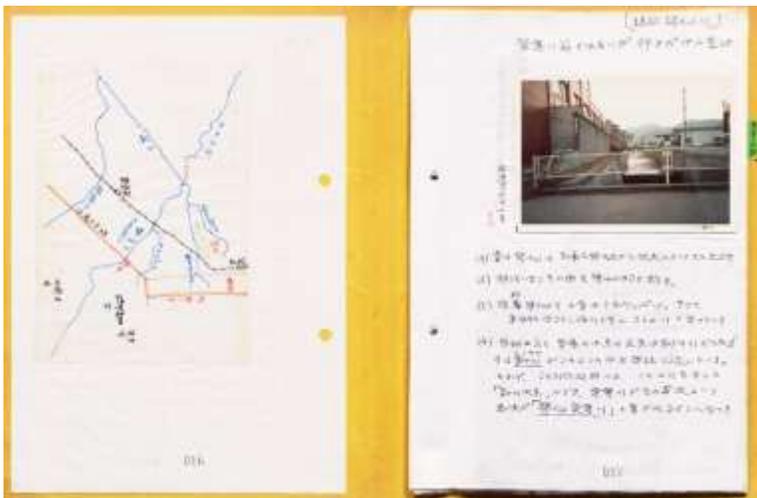


←【中頓別(頓別)】
山田秀三『北海道の地名』掲載「北見地方北部図」(部分)
図の右側(オホーツク海側)中ほどに「屯(頓)別川」がある。



【中頓別(頓別)】→
山田秀三による1973(昭和48)年の調査記録より、頓別川河口付近の地図など。

建物番号	建物	地名	山田秀三の説明によれば……(山田秀三の著作からの引用)
32	旧土谷家はねだし	熊石	檜山支庁内の町名。クマウシ←kuma-ush※-i (物乾し・多くある・処) の意。和人はその音から雲石という石の名から来たという説をつくった。アイヌ時代には物干し棹に魚を懸けて干したので、クマウシの地名のある処はたいてい好漁場である。諸地にある熊牛も同名である。 (『北海道の地名』) ※「ush」は、現在ひろく用いられているアイヌ語のローマ字表記では「us」となります。
38	旧ソーケシュ オマベツ駅通所	ソーケ シュオマ ベツ	尻別川の水源に近い北支流で、この川が虻田、有珠両郡の境になっている。永田地名解(※)は「ソー・ケシ・オマ・ペツ so-kesh※※-oma-pet (滝の・下・にある・川)」と書いた。(『北海道の地名』) ※永田地名解=永田方正『北海道蝦夷語地名解』 ※「kesh」は、現在ひろく用いられているアイヌ語のローマ字表記では「kes」となります。
39	旧田村家北誠館 蚕種製造所	浦白	浦白内 川名(札的内の北の川で石狩川支流)。……土地一枚一枚の名を調べて見た。本字も仮名書きも混じっているが、早く開拓されたらしい川沿いは多く仮名書きで、ウラウスナイとウラウシナイが多い。これが古い入植者の地名である処から見ると、アイヌの呼び名に近いであろう。ush (あるいはus。アイヌ語では同じこと) のついた名で、どうもurash※ (笹) ではなさそうである。それで逆に戻って、昔はどこかに築をかける処があつてurai-us-nai (やな・がついている・川) と呼ばれたのが浦白内となつたのではないかと思うようになった。(『北海道の地名』) ※「urash」、「urai」「nai」は、現在ひろく用いられているアイヌ語のローマ字表記では「uras」「uray」「nay」となります。
42	旧山田家養蚕板倉	琴似	現在は琴似は札幌市街北西部の地名になっているが、……札幌扇状地下部、つまり大通公園から北海道大学までにあった、たくさんの泉池川の水系の名がコトニで、その小川の流れている土地の名も従つてコトニで呼ばれていたのだつた。……訳の方から考えると、平たくいえばkot-ne-i (凹地・になっている・もの) の意らしい。北大裏に穴居跡が多かつたので、コッはそれかとの説もあつたが、コトニ諸川がいずれも泉池から出ていて、そこは低い凹地であつた。その凹地が琴似のkot だつたのではなかつたらうか。(『北海道の地名』)
48	旧菊田家農家住宅	野幌	永田地名解は「ヌプル・オチ。濁処」と書いたが何だか変だ。ヌプル (nupur) が地名に使われるのは川の水に温泉水が入ったりして、どぎつく色がついている場合で、めつたに出て来ないし、野幌の辺ではありそうに思えない。北海道駅名の起源昭和29年版※から「ヌポロベツ即ちヌプ・オル・オ・ベツ (野中の川) から出たものである」と書かれた方を採りたい。旧図の中ではノホロ、ノポロ、ノフロのように書かれている。 nup-or (野の・中、処) のように呼ばれていたのではなかつたらうか。 (『北海道の地名』) ※北海道駅名の起源=『北海道駅名の起源』。1929(昭和4)年初版刊行。



←【琴似】

山田秀三による1985(昭和60)年の札幌市内での調査記録より。

左側の自筆の地図の「琴似駅」のあたりが現在の琴似であるが、明治の初めごろまでは「北大」の赤い文字のあるあたりがコトニだつたのでは、といった考察が右側のメモに書かれている。

2019年8月 発行:(一財)北海道歴史文化財団

※ このシートに掲載した山田秀三氏の地名調査の記録は北海道博物館が所蔵している資料です。

※ このシートはイオン北海道株式会社・マックスバリュ北海道株式会社発行の「ほっかいどう遺産WAON」の助成により制作しました。